

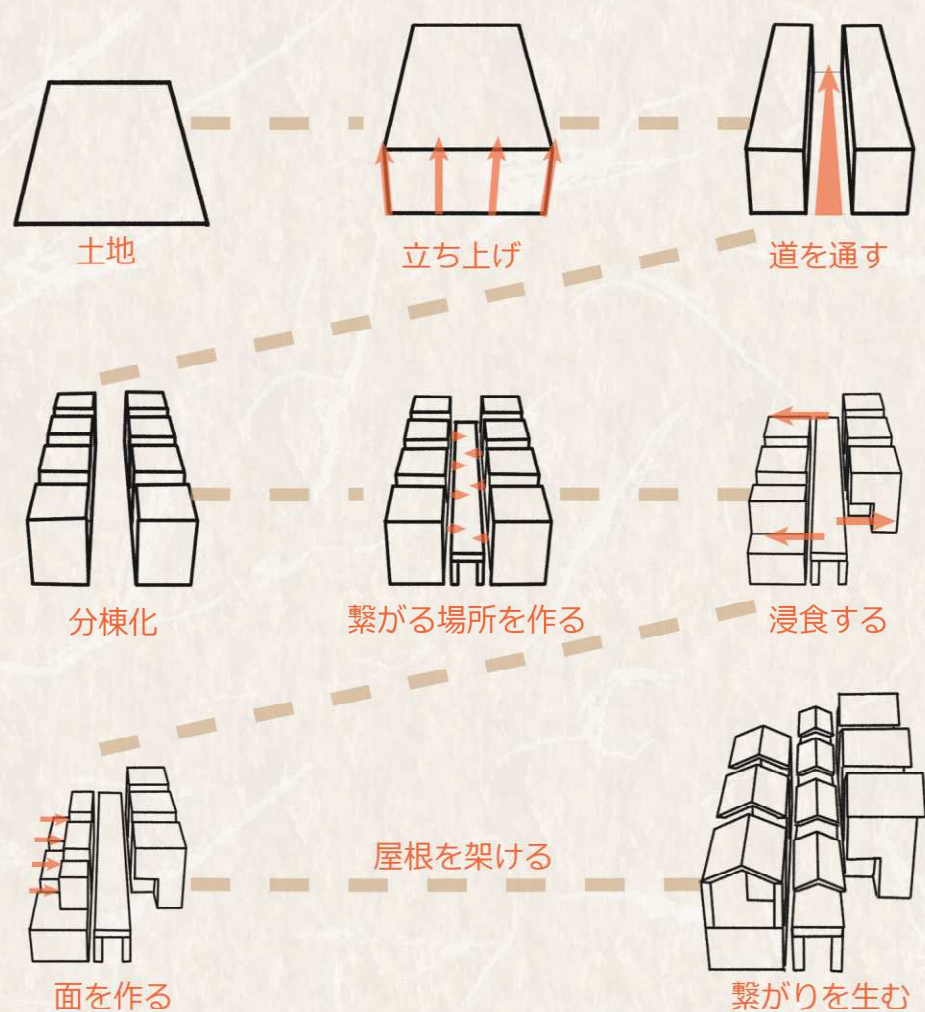
道と暮らす

01 10年後のわたしたち



近年のAIの発展に見られるように、IT技術の発達が目覚ましいものである。10年後にはIT技術の発達により、買い物、仕事、通院、通学、趣味など、様々な行為が家の中で行われることとなる。その結果、家に籠りきりになり、地域交流の減少で災害時に地域連携の低下が予測される。

04 形態ダイアグラム



02 せこみちに暮らす町「亀崎」

せこみちとは、密集した住宅の間の路地のことであり、亀崎の人々はこの「みち」とともに暮らしてきた。しかし、空き家の店舗化や、景観保護による建築物の制限など、外観だけを残すような施策により、人々がみちと暮らす文化は形骸化しつつある。



みちで生活する



道をつかう

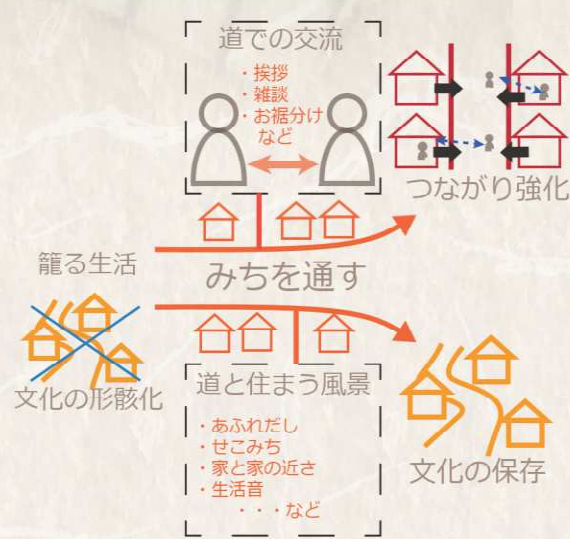


道にあふれだす

03 コンセプト

本提案では、この「みち」から人々の個性や趣味が溢れ出し、コミュニケーションを通して外に足を伸ばしたくなるよう形成。

また、それと同時に、みちと住まうという従来の文化を残し、より人のつながりが密になるような新しい亀崎の形態を提案する。



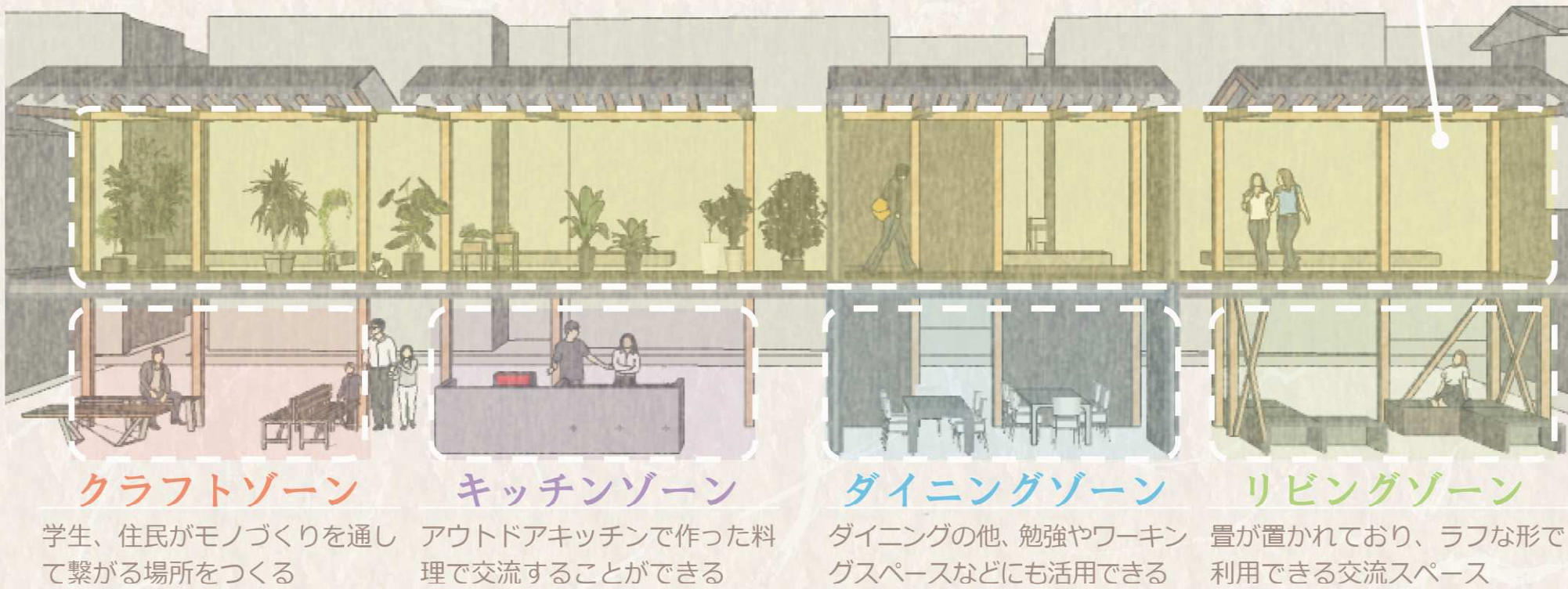
05 みちと住まうための要素「せこみちブリッジ」

家と家の間に設けたスペースを分割し、役割を与える。

スペースは日常生活の中で使われるため、住民は自然と道にあふれだし、日常の中で普段の生活をするだけで交流を生み出すことができる。

あふれだしゾーン

亀崎の文化を用いて個性ある、自由なあふれだして住民の交流促進を図る



緑のあふれだすブリッジ二階



狭さが人の距離を曖昧にする



風景に溶け込む連続性



住戸の西側は店舗としても活用でき、住と商が一体となっていた昔の亀崎の風景をファサードにすることができる。

配置兼平面図 1/100



2階平面図 1/200

店舗側のベランダは商品や看板を設置し、あふれだしができる
ベランダからせこみちブリッジに接続できる

道を通し、住居間をつないでいる

土間にキッチンを設置し、店舗としての活用を可能に

入り口をせこみちブリッジ側に向け、行きやすい空間(リビング、作業スペースを)配置

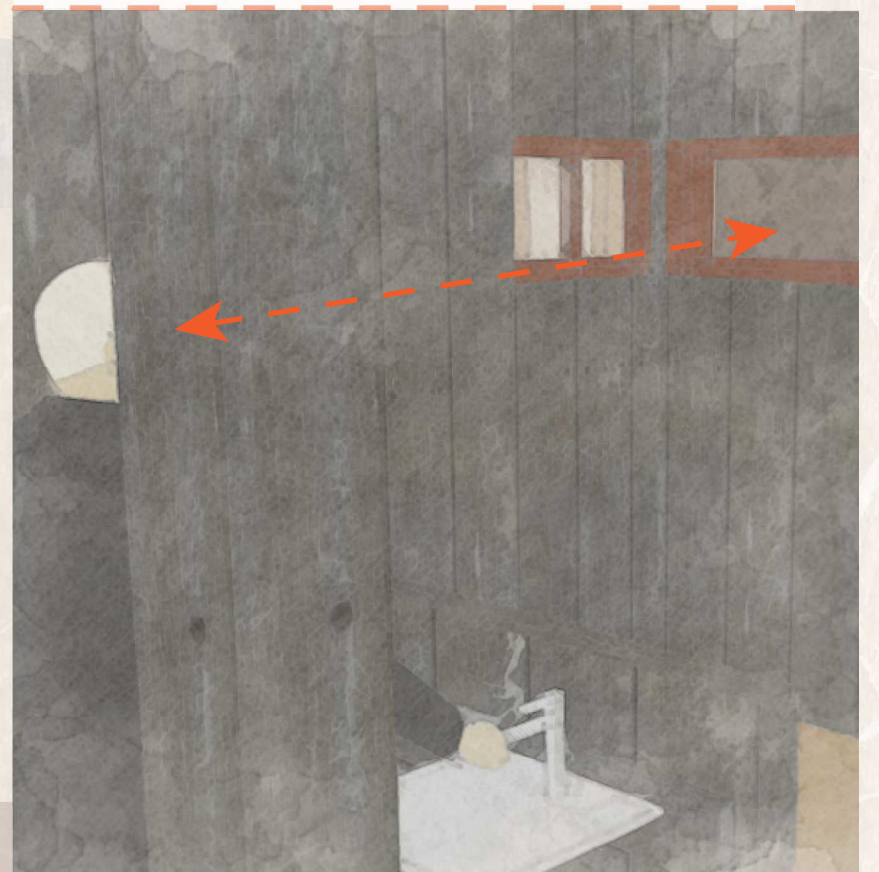
シェアキッチンは、外にあるため、災害時には防災キッチンとしても使用することができる

道側に設けられた倉庫は、災害時に備えて物資を備蓄することができる。

せこみちブリッジと住戸の間の余白が、「あふれだし」を促進し、亀崎の風景とともに意識外の交流を生む

キッチンは空間をゆるやかに分節すると同時に立ち作業時に外が見えるようになっている

人の気配を感じられるように道側に窓を配置、高さを1300とすることで立位時のアイレベルに設定



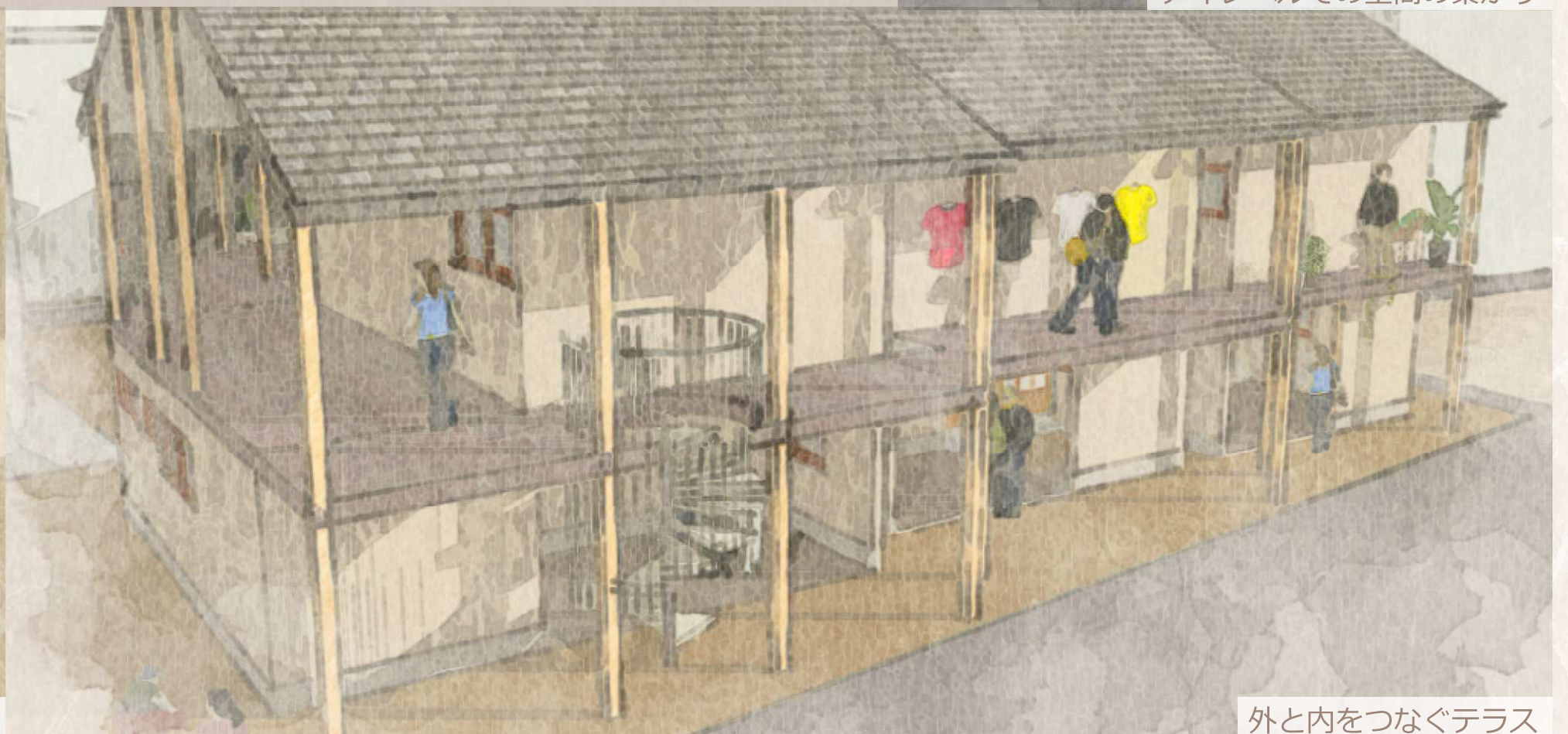
アイレベルでの空間の繋がり



断面図 1/100



リビングからサンダルでブリッジに



外と内をつなぐテラス